バレエの交差点～シアター・ノート

連載コラム ③

野外公演のすすめ

ヤング靖子

私が初めてシンガポールダンスシアター（SDT）を知ったのは、シンガポールに来て間もなく、街で見かけたポスターでした。Ballet Under The Stars(星空の下のバレエ)というタイトルに、イギリスに住んでいた頃に行った野外のクラシックコンサートを懐かしく思い出しました。当時、慣れない外国暮らしに苦労していた友人親子を気晴らしにとお誘いし、フォートカニングの丘へ繰り出しました。

赤道直下ではピクニックは夜にするものかと、シートを広げて辺りを見回した事を覚えています。日が落ちるにつれて公園の豊かな緑が会場全体をふんわりと包み込む、薄暮の優しい空気が流れ、タイトル通りの星空の下、バレエを堪能致しました。終演後に、そのお友達が「言葉が通じなくて悲しくなる時もあるけど、こんなに綺麗なものを見られる国なら、もう少し頑張ってみる」と涙をポロポロ流したのが忘れられません。

思い出多い野外公演ですが、その歴史は25年前に遡ります。当時、SDTのスタジオはフォートカニングセンターにあり、その場所を使って、カジュアルな雰囲気で、家族や友人と芸術を楽しむ催しを、と考え出されたのが最初で、それがこの国の野外公演の第一号でした。以来、「星空のバレエ」はSDTの年６回の公演中、最も親しまれる公演となり、初めて観たバレエがこの公演だったという方も少なくありません。今年はJCCI基金様のご支援を頂き、日本の方にもより親しんで頂けるイベントに成長しました。後に、シンガポール・シンフォニー・オーケストラ（SSO）やメトロポリタン・フェスティバル・オーケストラ（MFO）、シンガポール国立大学(NUS)の学生オーケストラなども追随してボタニック・ガーデン等でコンサートを開き始め、野外アートのシーンが増えました。

異なるカテゴリーの作品を気軽に楽しむ機会として、野外公演はお勧めです。劇場に比べて料金がお手頃ですし、年齢制限も緩やかな場合が多いので、小さいお子さんのいらっしゃるご家族でもお楽しみ頂けます。プログラムも知名度の高い演目や曲目が多いので、初めての方も気後れする事なく作品に入り込めることでしょう。SDTの野外公演はクラシック（またはネオクラシック）の週、コンテンポラリーの週の２本立てで選択肢の幅も広く、多くの場合、演目の間に説明が入るので、作品についての知識を得られます。英語が苦手な方は、聞き取りのレッスンと考えるのも一興ですね。クラシック音楽の野外公演でも同じような構成になっていることが多いようです。

特設ステージでは、ダンサー達は劇場で着用するのと同じ衣装で踊ります。気温と湿度とそしてお天気を選べないことを考えると、劇場に比べてハードな環境ですが、踊る側も野外公演は楽しみなイベントです。

「開放感が大好きです」と教えてくれたダンサー、「リラックスしたお客様の様子を見るのは嬉しい」と教えてくれたダンサーもいます。公演後にダンサーとばったりという時もあり、踊り手とお客様の距離の近さも魅力の一つです。

また、シンガポールではなかなか機会のないピクニックを楽しめるのもお勧めする理由の一つです。私は毎年張り切ってお重箱にお弁当を詰めて出掛けますが、お店で食料を調達される方も沢山いらっしゃいます。おすすめは早めに行かれることです。ウォーミングアップの様子を見学出来るのは野外公演のみですので、ダンサー達の鍛え抜かれた体の動きを見るのも楽しいですし、小さなお子さんが舞台の前で一緒に踊る微笑ましい姿も見かけます。

…と書いていると、明日にでも皆様をご案内したくなりますが、この南十字星がお手元に届く頃、9月25日からの公演が実現するかは、現時点では残念ながら分かりません。振り返ってみると、バレエに限らず、音楽や演劇といった舞台芸術は何世紀にも渡って、疫病や戦争といった暗い歴史を生き抜いた力を持っています（ロミオとジュリエットの行き違いも当時の流行病で街の出入りに制限があったためと読んだことがあります）。コロナ後の新しい日常生活に、過去と現在を繋ぐ芸術との一期一会の機会が戻ってくることを祈らずにはいられません。

画像提供：Singapore Dance Theatre、三浦丈明

プロフィール：ヤング靖子
Singapore Dance Theatre, Ambassadors Council
JCCI 基金贈呈式では 日本を代表する企業の皆様から温かいお言葉を頂き、身の引き締まる思いでした。ご厚意に感謝し、日本とシンガポールの架け橋となるよう頑張ります。

公演情報
Performance information

2019年の野外公演　休憩時間には、くじ引きのプレゼントなども

2019年の野外公演　会場の様子

スタジオで公演直前まで続くリハーサル

峯岸伽奈さんと中村憲哉さんのオディールとジークフリードが
会場を魅了したクラシック・ウィーク

シンガポール出身の振付家、チューサン・ゴーの代表作の一つFIVE

コンテンポラリー・ウィークよりLinea Adora
線としての動きが印象的な作品